

■ 2009年度 入試問題分析シート ■

東京大学

前期日程

科目

化学

総括

試験時間	2科目 150分	難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
満点(配点)	2科目 120点	分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

〈総論〉

例年どおりの出題パターンで、理論、無機、有機分野から大問が3題出題された。第1問は火星の鉱石、廃棄プラスチックの燃焼など、題材は目新しい。標準レベルだが、計算は時間がかかりそうであった。第2問は無機と理論分野が融合されてレベルが高い。第3問の有機を確実に得点しておくことが必要であった。

〈特記事項・トピックス〉

回転異性体のニューマン投影式が出題された。
全体に目新しい工夫が見られた。

〈合格への学習対策〉

化学の基礎を深く理解し、種々のテーマについて自分で考察していく能力を高めることが大切。問題量が多いので、得点源となるところを的確に見抜くセンスも磨いておきたい。

設問ごとの分析

問題番号	出題形式	範囲	分野・テーマ	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
第1問	記述 論述	I・II	I・鉄の酸化反応 II・熱化学	テーマは目新しいが、基礎学力があれば必ず出来る内容であった。 計算が多く、間違いやすいので、計算処理能力で差がつく。高分子の燃焼熱は少し戸惑うところ。表1-2は最後に出てくるので、設問クで使うのを忘れやすい。	標準
第2問	記述 論述	I・II	I・ガラス中の金属元素の分析 II・同位体の存在比	無機と理論の融合。硫化物の沈殿について、溶解度積やpHの関係を理論的に展開。グラフを書く設問はレベルが高い。 同位体の存在比を人工的に変える内容は目新しい。	やや難
第3問	記述	I・II	I・環状エステルを含む構造決定 II・回転異性体の安定性の比較	環状構造を含む構造決定で、完答したい。 目新しいが題意をつかめば何とかできる。	やや難

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階〔難・やや難・標準・やや易・易〕で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。